

## 肝炎ウイルス検診

みんな、肝炎ウイルス検診をご存じでしょうか。地方自治体が行う検診としてがん検診（胃がん、肺がん、大腸がんなど）や特定健康診査などは以前からあり、なじみ深いと思います。肝炎ウイルス検査は平成20年度から開始された比較的新しい検診となっています。具体的には血液検査にてB型およびC型肝炎ウイルスが存在するかどうかを判定する検査です。

陽性の結果がでれば、B型肝炎やC型肝炎の持続感染の疑いがあります。肝臓専門医療機関での精密検査が勧められます。

我が国の肝炎（ウイルス性肝炎）の持続感染者は、B型が110万人～120万人、C型が90万人～130万人存在すると推定されていますが、感染時期が明確ではないことや自覚症状がないことが多いため、適切な時期に治療を受ける機会がなく、本人が気づかいうちに肝硬変や肝がんへ移行する感染者が多く存在することが問題となっています。しかし、医療の発展によって内服の抗ウイルス薬が登場し、B型肝炎ウイルスは継続内服にて増殖活動を抑えられ病気の進行を止められます。C型肝炎ウイルスにおいては、約2か月間の内服にてほとんど副作用なく、ウイルス自体を完全消失し疾患治療が得られるようになりました。このことでウイルス性肝炎による肝硬変や肝がん患者は減少しています。

しかし、前述したように未発見未治療の肝炎患者はいまだ存在しており、症状が進行してから発見される患者もまだまだいます。

国は肝炎ウイルス検診を施行することで未然に患者さんを発見し早期に治療することを目指しています。すべての国民が一生のうち1回は肝炎ウイルス検査することが望まれます。

手術入院患者さんは術前のスクリーニング検査、人間ドックや健康診断ではオプションでの検査で行っている場合があります。しかし、一見健康で入院や手術をしたことがない方や、家庭の主婦などドッグ健診を受ける機会が少ない方はいまだ肝炎ウイルス検査をしていない可能性が高いです。

B型およびC型肝炎ウイルスの感染経路は主に血液を介した感染です。過去では輸血などの血液製剤、滅菌不十分な再生注射針などが感染源になっていました。特に1941年7月～1988年1月まで生まれた方で、満7歳までに集団予防接種を受けている方はB型肝炎に感染している可能性が高いです。また、妊婦においては昭和の時代には出産時に多量出血などで血液製剤（輸血や血液凝固因子製剤）を注射されたかたはC型肝炎のリスクがあります。これら条件に当てはまる方は積極的に検診を受けましょう。そうでない方でも1回は受けることをお勧めします。住民票のある市町村で保健所もしくは委託された医療機関（港南区では70か所以上）で検査可能です。ほとんどの場合は自己負担金なくできます。かかりつけ医にご相談ください。

もし、陽性の結果が出た場合には精密検査や治療が必要な場合があります。神奈川県指定の肝臓専門医療機関受診が必要です。港南区には9ヶ所あります。県のホームページ（肝臓専門医療機関一覧）にて検索可能です。治療が必要な場合は県からの助成金もあり低い自己負担治療費ですみます。肝硬変や肝臓がんに行き届く前に治療が必要です。まだ一度も肝炎ウイルス検診を受けていない方はぜひこの機会に受けることを強くお勧めします。